

ビスを受けることができるといったものです。3)の場合は、私の知る範囲では国内にはその例は見当たりませんが、海外にならその報告があるようです。しかし、かなり規模の大きな図書館間でのもので、どうやら私たち病院図書室として参考になるものではないようです。

しかし、病院図書室のネットワークの場合、確かに規模的に若干の大小の差はありますが互いに対等平等の関係ですし、専図協のように、あらゆる分野での専門図書館のネットワークとは異なり、扱う資料は一定しています。また利用者も医療従事者と一定しています。ですから、できるできないの問題は別にして、1)～3)の形態の中では、3)の形態が最も理想的であるように思います。

では病院図書室としては、デポジットライブラリーの可能性はゼロなのでしょうか。あるとするなら、存在意義はどこにあるのでしょうか。

その答えとして私は、私たちのデポジットライブラリーへの第一歩は「共同収集」という方法が最も効果的であると考えます。はじめから、利用頻度の少ない資料(利用頻度が少ないといっても病院図書室には欠かせない資料ですが)を決めておいて、共有財産として買ってあげれば、個々の図書室では以後、購入を控えることもできるでしょう。理想をいえば、どの図書室にもないものがデポジットライブラリーにはある、となれば最高でしょう。

今、正面きって病院図書室として、デポジットライブラリーの可能性はどうかと質問されれば、もちろん、一足飛びには不可能だと答えるしかありません。必要なか不必要なのかさえおおいに論議が必要な課題です。ただ、私たち病院図書室においての資料保存という課題を解決してくれるヒント、可能性をもったものであることはいえると思います。

5. 一步進んだ図書館協力

これは「分担保存」「分担収集」といった現在の概念を一步進めた考え方ととらえることもできると思います。

具体的には、各病院図書室間、または今あるネットワークの相互利用を超えた広い意味での相互

協力体制(たとえば、分担収集、分担保存という一步進んだ形の図書館協力)が整備確立されなければならない時にあるように思います。

このような病院図書室間のネットワークを築いていくということは非常に困難であるとは思いますが、観点をかえて考えてみれば、それは逆に必然的な流れでもあるように感じられてなりません。

6. まとめ

より高度な図書館サービスは、より整った図書館協力体制に支えられた時にこそ、力が発揮されていくのだということを今、再認識する必要があるのではないのでしょうか。

質疑応答

はじめに座長よりシンポジストに資料の廃棄をしたことがあるかという質問があり、全員廃棄の経験があるとの答えであった。

Q 1. 購入が中止になった雑誌でも購入年数が長ければある程度存在価値があると考えますが、何年位が基準になるか。(岡村慶子・国立東2)

A. 飯田育子：購入中止ということには利用統計や利用者の判断が入っていると思うが、その雑誌を取っておく方がいいかどうかは再度利用者に聞く必要があるだろう。臨床的な雑誌は15年位保存しておけば利用価値があると思う。

Q 2. 廃刊休刊になった雑誌を廃棄対象にする根拠は何か、その廃棄時期についてどのように考えるのか。(林伴子・社保神戸中央、山室真知子・京都南)

A. 飯田育子：ある雑誌が廃刊休刊になった場合には内容が同じような雑誌を購入する形で代替できる。しかし、廃刊休刊により購読中止となった

もの全てを廃棄するのではなく、なおかつ不用と判断されたものという条件づけをしているので、利用者の判断が入ると考えている。いい雑誌がやむを得ない事情で廃刊に追い込まれたような場合にはとっておいて、例えば15年保存ということで年数が経ったら廃棄すればよいのではないか。

Q 3. 廃棄・廃棄基準を考える場合には利用者の意見を聞く必要があるが、どのような方法で、どのような利用者に聞か、またそれを判定する人たちの図書室に対する関心度はどうか。(重富久代・京都市立)

A. 千住とも子: 廃棄の趣旨を図書委員長より病院管理会議で話してもらい、またその趣旨を印刷して院内各所に一定期間掲示する。最終的に各診療科部長に図書係から再度個々に問い合わせしてから廃棄した。どうしても保存したいものは希望者への寄贈や各部署での一部保存とした。

加島民子: 図書室のスペース上、図書は20年、雑誌は10年という原則で廃棄する。図書に関しては千住さんのところと同じく図書委員会で決定し、役員会で了承の上、廃棄対象図書を表示して関連各科に問い合わせ、どうしても保存したいというものは個人へ寄贈した。

雑誌は全雑誌リストを医師全員と各部署に配布し、一人でも保存希望のあったものは残している。病図協の分担保存の対象にもなるかと思ひ、図書室で保管している。

飯田育子: はじめに書架スペースの計算をし、その結果を図書委員会で報告した。院内の他の置き場所も検討したが、結局雑誌は15年での廃棄が承認された。さらに全常勤医師にアンケート用紙を配り、廃棄を承認してもらえるか否か、残して欲しいものは何かについて回答してもらった。その上、各科部長のサインをもらい、リストにして再度図書委員会で承認の上、管理者に回して承認を取り廃棄した。しかし、当院の場合は全く捨ててしまうわけではなく、地域ネットワーク各施設にこのリストを送り、希望するところに引き取ってもらっている。

前田元也: 図書は2カ月に1回の図書委員会で

買い替え図書選定を行い、改版図書などを買い替えた場合には旧版を保存するか、廃棄するかを決めている。廃棄本は病院全体に呼びかけて希望者に寄贈している。

雑誌は1誌1誌に対して廃棄基準、廃棄年数を決めている。これは医師全員に1誌ごとの保存年数についてアンケートをとり、また看護関係、コメディカルについても各職場長宛にアンケートを出し、職場会議の結果を図書委員会で最終決定した。さらに、これを病院全体に広報する。廃棄雑誌は図書と同じく希望者に譲っている。

この方法の利点は利用者に蔵書を知ってもらえること、図書室の存在をアピールするのに役立つことである。今のところ、廃棄が決まっても保管スペースに余裕があれば担当者の判断でできるだけ残している。資料によって異なるが、おおよその保存年数は10年。

座長: おおよその廃棄基準をもっているところは、それに合致した蔵書を図書委員会で検討し、その後院内関係部署に公示して管理者の責任で廃棄しているようである。

Q 4. 最近廃棄のための料金が有料化する傾向にあるが、その点について経験されたところの状況が知りたい。(篠原寿美江・市立川崎)

A. 千住とも子: 総務からの廃棄命令で全て総務で処理したので、詳細はわからない。

加島民子: 以前何トンという単位で捨てた時は廃品回収業者からある程度お金をいただいた。また、図書室で図書雑誌以外の資料を捨てるのに1キロ100円で、お金を払った。今回は4,000円～5,000円支払って廃棄した。

千住とも子: 今回の廃棄の際にも古本屋に来てもらったが、引き取ってもらえなかった。15年位まえに学会誌関係を処分した時にはリストを東京の古書店に送って日本内分泌学会誌がいくらか売れたことがある。お金に関しては経理課で処理された。

座長：廃棄に際して利用者はどのような関心を持っているか、また保存ということや本に対する大切さをどのように考えているか、アンケートや廃棄を実施された経験からその感触といったものをお聞かせ願えたら。

A. 千住とも子：非常に個人差があるようだ。

加島民子：うちも同様。ただし、廃棄資料を引き取る人が思ったより多かった。

飯田育子：当院医師に対する旧版保存のアンケートでは医師28名中、新版があれば旧版はいらないと答えた人は23名、旧版もいると答えた人4名、全部置いて欲しい人1名だった。個人的な印象では年輩の医師は本に対する愛着があり、若い医師は形よりも情報そのものが欲しいという感じを受けた。

前田元也：当院では事務系管理者に図書室の役割が理解されにくい面があり、事務系が利用者に無断で図書の廃棄をやりようとしたことがある。全蔵書の20%近いものが先生からの寄贈で、そういった学会雑誌等を事務が無造作に廃棄しようとしたことで、医師や看護婦が激怒した。この事件で廃棄や蔵書に対する利用者の意識を再認識し、心強く思った。

Q 5. CD-ROM版やオンラインを導入した際、医学中央雑誌、Index Medicus等の二次資料の保存・廃棄はどのようにしているか。(吉富まち子・竹田総合)

A. 千住とも子：CD-ROM Medline 導入時に Index Medicusは購読中止。医学中央雑誌は費用的に冊子体を購入してようが止めようが大差ないので継続して購入している。ただし、DialogのCD-ROMは1984年からの収録で、それ以前のIndex Medicus (Monthly版)は残している。しかし、利用が少ないのでいずれは廃棄を検討しなければならないかもしれない。

上原みどり(三井記念)：普通はCD-ROM Medlineの導入によりIndex MedicusのMonthly版を捨てているところが多いようだ。これは冊子体

の方がタイムラグが大きいということがある。

加島民子：1980年からオンラインを導入している。もともとIndex Medicusは購入していない。医学中央雑誌は創刊近くから所蔵しているが、古い分は箱詰めで使用不能。CD-ROMはまだ導入していないが、冊子体はCDで対応していない年度の方は置いておく必要があるかもしれないが、他は不要と思う。

飯田育子：昨年春CD-ROM MEDLINEを導入した。その際、Index MedicusのMonthly版は購入中止にした。現在Cumulate版のみ購入している。これも中止の話が出たが、図書委員長がブラウジング効果等、冊子体の長所を強調して絶対に止めてはいけないと言われ、継続している。

医学中央雑誌は今年CD-ROMが入る予定。料金の兼ね合いから冊子体と二本立てにするつもりである。医学中央雑誌の1970年以前の分は二次資料は残すという方針で残しているが、倉庫に横積みになっていて利用不能である。

前田元也：図書選定費の枠(年間420万円)が決まっており、4年前にオンラインを導入した際、医学中央雑誌を中止。オンライン検索費は病院負担で年間12万円まで。しかし、医学中央雑誌年間累積版は購入していたが、最近年間累積版のみでは売らないと言われ、よく使われる資料だけにどうしようかと悩んでいる。Index MedicusはCumulated版を現在も購読中。

上原みどり：CD-ROMなどの導入のときに、引き換え条件に、冊子体二次資料を中止するのはなるべく避けた方がよいのでは。不十分なコンピューター検索は危険な面もあり、図書館員がCD-ROMのライセンス契約等についてよく説明するなどし、安易に冊子体を捨てるべきではないと思う。

前田元也：その意見に賛成。マニュアル検索はいろいろと勉強になるので、冊子体は大切だと思う。ただし、当院のように図書費が非常に限定されている場合、どちらかを選択しなければならない。

奥出麻里(川鉄千葉)：オンラインを3年前に、今年CD-ROMを導入した。医学中央雑誌はまだ購入中であるが、Index MedicusはMonthly版もCumulated版も中止した。実際利用もあまりないので、CD-ROMに対応している1966年以降のIndex

Medicusも除籍予定である。

千住とも子：費用とスペースがあれば冊子体、CD-ROM、オンラインを揃えられる。ぎりぎりの選択の場合に何を揃えるかということではないか。

座長：オンラインもCD-ROMもそれぞれいいところがあると思う。ただし、今はまだ完全なものではないし、今後の動きを注目しながら様子を見ていったらどうか。

Q 6. 雑誌を廃棄している図書室で、製本の基準があれば教えて欲しい。また、製本しないものについてはそのまま置いておくのか、あるいは簡易な合本の方法をとっているのか。
(野原千鶴・済生会下関総合)

A. **千住とも子**：以前は受け入れているものほとんどを製本していたが、廃棄の時、廃棄することが分かっているものも製本すべきかどうか考えた。これからは製本して保存するものと未製本で保存するものを決めたい。

飯田育子：購入しているものについては15年保存で毎年製本する。寄贈のうち学会雑誌は製本、商業ジャーナリズム的な雑誌(日経メディカル、モダンメディスン等)は10年保存で担当者が仮とししている。ポイントは寄贈雑誌の取捨選択だと思う。また、保存年数によって5年未満のものは未製本のままでいいのではないか。

山室真知子(京都南)：一度廃棄を経験し、それ以後10年以内に捨てるものについては製本していない。未製本は複写のしやすさや背表紙の特集記事が見られるという利点もある。いかにも未整理という感じを与えないために製本準備のような形で製本1冊分の厚さになるようひもで結んで配架している。薄いものはパンフレットボックスなどを使う。分担保存対象誌や長期保存の専門誌は、3年くらい経ってから製本している。

Q 7. 分担保存の必要性について、また近畿病院図書室協議会のように病院図書室での分担保存の是非についてフロアからも意見が聞きたい。(上原みどり・三井記念、重富久代・京都市立)

A. **吉富まち子**：福島県のネットワークは13機関が加盟しているが、設立後丸8年経った今、大学も含めて分担保存を考えていこうとしている。近畿では大学との関わりをどう考えているか。

加島民子：病院図書室で分担保存なんかしないでいいという意見はよく聞かすが、まだ文献の流通に関してはきちんと保障されたものがないこと、近畿病図協内でできるだけ資料の保存をしようと考えているなどからこれに取り組んでいる。

大学との関わりでは20年近く前からJMLAの地区協議会にオブザーバーとして出席させてもらっているが、栃木や福島のネットワークのように一つの大学と周辺の病院という形での相互協力関係ではない。協議会内では相互貸借される総文献件数の1/3しか賅えないが、その1/3だけでもきちんと保存したいということだ。分担保存を大学と一緒にという考え方は今のところしていない。

飯田育子：静岡では浜松医大、病院、医師会等26機関でネットワークを作っている。現在分担保存の話はでていないが、医大ではまだ廃棄の予定がないため病院が安心して廃棄できる。つまり、医大が保存図書館としての役割を果たしてくれるわけで、病院での廃棄資料のリストを医大に渡して必要な資料を保存してもらっている。また、重複雑誌リストを作成し、その中からも必要なものを医大が引き取ってくれている。ただし、自館のユニークタイトルは一応残しておくことが必要ではないか。また、新規購入の時、医大で所蔵していない雑誌を購入するよう積極的に努力している図書室もある。分担保存のことはこれから課題としたい。

篠原寿美江(市立川崎)：病図研とJMLA関東地区ネットワーク化委員会で現行医学雑誌所在目録を作成中であるが、病院図書室には大学にない地域的な雑誌等ユニークタイトルが所蔵されているという特徴が見られる。また、病院で使うのは臨床的なものが多い。このあたりを考慮して分担保存をやっていく必要がある。

ただ、病院図書室で分担保存をやろうとすると、スペースなどの点で負担が大きくなるのではないか。

石澤實枝(東京厚生年金)：加島さんの出された資料では図書室の平均職員数が1.5名、兼務

も多い中で全体の33%の文献相互貸借業務を賄うのはたいへんではないか。努力は認めるが、大学との結びつきを強化した方がいいのではないか。

加島民子：実際には大学に半分以上依頼しており、大学のサポートがなければ成り立たない。大学との協力も以前からきちんとしているが、やはり協議会内ではできることは自助努力をしよう。公的なネットワークができれば病院図書室ががんばらなくてもいいと思う。今回の結論としては、今のところは協議会で分担保存に取り組む意義はあるだろうということだ。

Q 8. 外国雑誌で購読料に少し上乗せした料金を払うとCD版を購入できると聞いたが。
(山崎捷子・淀川キリスト教)

A. 熊谷智恵子 (虎の門)：Excerpta Medicaを購読していると過去の分は必ずCD版を送ってくる。1986～1987年以前のもは450ドル(9万円)位で購入できるそうで、当院では購入予定。

飯田育子：紀伊國屋書店発行の「CD-ROM総覧」(1991年発行、20,600円)でみるといくつかの外国雑誌がCD-ROMになっているようだ。この中で興味深いのはYearbook on Discで、これはYearbookの全シリーズがフルテキストで収録されている。1988年から出ており、買い取りで79,000円となっている。この総覧を参考にするとよい。

座長：その他、この際どうしても言っておきたいことがあれば。

A. 上原みどり：自分のところで捨てるものでも他の図書館や図書室では有用なものもあると思う。廃棄の際は声掛けをすると喜ばれ、他の役に立つ場合もあるのでそれを心がけたらどうだろう。これは欠号補充の時にも言えるので、お互いの情報交換が大切だ。それと、東京のバックナンバー屋では、例えば脳神経外科や神経内科等の新しい学問領域、小さい科から発展して主流となった領域等のバックナンバーはまだ買ってくれるところがある。これも欠号補充に役立つ時があるので、簡単

にゴミとして捨てないという気持ちは大事にした

座長まとめ：病院図書室というのはやはりスペースの制限があり、その一方で医学資料は医学医療の進歩発展と相まって増加し、年々かなりのスペースが必要とされる。

病院の場合、医師の利用は割と新しいものが幅広く利用されているのではないだろうか。そこはやはり踏まえておく必要がある。

きょうの討論だが、スペースに制限がある限り、いずれは廃棄ということを考えなければならぬし、また新しい資料を入れていくためには古いものをある程度整理していかなければならないということだと思う。ただし図書室の根本的な使命は資料の保存で、廃棄はあくまでも慎重に考えなければならない。その際にはCD-ROMやニューメディアの動向に十分注意しておく必要がある。また時間的に討論できなかったが、デポジットライブラリーというのも話題になるだろう。

病院図書室は大学図書館とは少し違うのではないかと思うので、やはり病院という一つの同じ背景をもった病院図書室のネットワークは必要だと思う。そういう中でネットワークは重層的にどうか、必要な時は大学の図書館も利用させていただくということではないか。

資料の廃棄は図書委員会等で討論すること、公示すること、廃棄後のフィードバックというか皆の意見を図書室がしっかり掴むことが必要なようだ。管理者の立場から言えば図書室は直接の収益部門ではないので、皆さんのご苦勞はたいへんなものだと思うが、今後の健闘をお願いしたい。

質疑応答まとめ：山崎捷子(本誌編集部)